

Economic Trends

マクロ経済分析レポート

テーマ: 今年の夏休みが日本経済に及ぼす影響 発表日: 2005年8月1日(月)

～昨年より+0.7日の増加で、名目GDPを+2,193億円押し上げ～ (No. N-36)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 永濱 利廣(03-5221-4531)

(要旨)

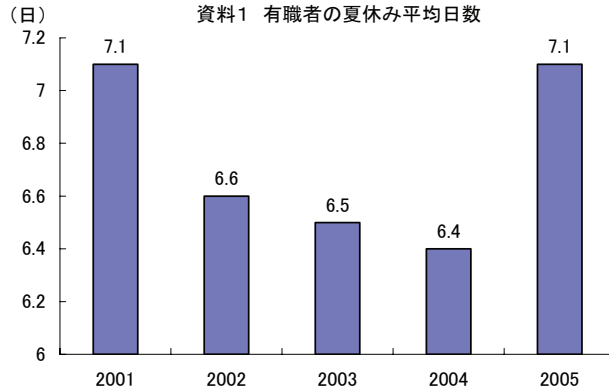
- 電通リサーチの調査によれば、東京近郊の有職者が予定している今年の夏休みの平均日数は7.1日と昨年より+0.7日増える予定。休日が増加すれば、娯楽・レジャー・外食等への出費増を通じて日本経済に好影響を及ぼす可能性がある。
- 過去の有職者の余暇時間との関係から導き出せば、夏休みの+0.7日増加は名目家計消費支出を+2,253億円、GDPの控除項目であるサービス輸入を+60億円増加させ、今年7-9月期の名目GDPを+2,193億円(前年比で+0.2%p)押し上げる効果が期待できる。
- 足元の有職者を約6332万人(2004年度平均就業者数)とすれば、有職者一人当たりでは約+3,558円ほど名目GDPを押し上げることになる。
- 名目家計消費支出への影響を品目別で見れば、外出に関連した娯楽・レジャー・文化や外食・宿泊、保健・医療、および自宅にいる頻度の高まりを受けた住居・電気・ガス・水道や通信費等への支出が増加することになる。
- 名目GDPへの影響を産業別で見れば、外出に関連したサービス業や卸売・小売業等にはプラスの影響が及ぶ一方で、労働投入の減少や設備の操業時間縮減を伴う農林水産業や鉱業等ではマイナスの影響が及ぶ。
- 昨年に比べて夏のボーナスを始めとした雇用・所得環境が改善していることや、愛知万博等のイベント効果、テロにより海外旅行が一部抑制される可能性があること等を勘案すれば、当社が想定する以上の特需が発生する可能性もある。

●今年の有職者の夏休みは昨年より+0.7日増

今年の有職者の夏休みが長い。電通リサーチの調査によれば、有職者が今年予定している夏休みの取得日数は7.1日と昨年の平均6.4日より+0.7日長くなった(資料1)。また、有職者の夏休みの予算も昨年の9.5万円から今年は10.2万円と4年ぶり10万円を越える結果となっている(資料2)。休日が増加すれば、娯楽、レジャー、外食等へ費やす時間が増え、これらの関連支出が増加することが予想される。ただし、海外旅行の増加により海外での支出が増えれば、サービス輸入の増加を通じてGDPの押し下げ要因となる。

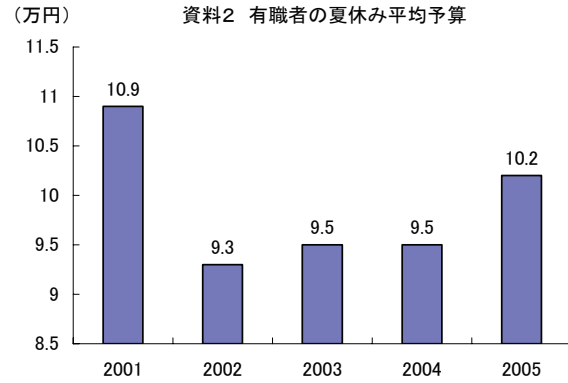
そこで本稿では、今年の有職者の夏休みが昨年より+0.7日増加することによる個人消費やサービス輸入の増加が日本経済に及ぼす影響を試算してみた。

資料1 有職者の夏休み平均日数



(出所)電通リサーチ「2005年夏休みについて」より作成

資料2 有職者の夏休み平均予算



(出所)電通リサーチ「2005年夏休みについて」より作成

●今年の夏休みは7－9月期の名目GDP前年比を+0.2%p押し上げ

夏休み+0.7日増に伴う名目GDP増加額：約2,193億円

(2004年7－9月期の名目GDPの約0.2%に相当)

うち家計消費増を通じた押し上げ：約2,253億円

(2004年7－9月期の名目個人消費の約0.4%に相当)

うちサービス輸入増を通じた押し下げ：約▲60億円

(2004年7－9月期のサービス輸入の約0.1%に相当)

(出所) 内閣府「国民経済計算」、財務省「国際収支統計」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

名目家計消費増加額(約2,253億円)の費目別内訳

被服・履物	: 約▲ 141億円
住居・電気・ガス・水道	: 約+1,324億円
家具・家庭用器具・家事サービス	: 約▲ 185億円
保険・医療	: 約+ 217億円
その他	: 約▲ 321億円
通信	: 約+ 166億円
食料・非アルコール飲料	: 約▲ 309億円
アルコール飲料・たばこ	: 約+ 39億円
交通	: 約+ 262億円
娯楽・レジャー・文化	: 約+ 935億円
教育	: 約▲ 78億円
外食・宿泊	: 約+ 343億円

(出所) 内閣府「国民経済計算」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

名目GDP増加額（約2,193億円）の産業別内訳

農林水産業	: 約▲	88 億円
鉱業	: 約▲	4 億円
製造業	: 約+	63 億円
建設業	: 約+	16 億円
電気・ガス・水道業	: 約+	25 億円
卸売・小売業	: 約+	421 億円
金融・保険業	: 約+	208 億円
不動産業	: 約+	127 億円
運輸・通信業	: 約+	287 億円
サービス業	: 約+	1,140 億円

(出所) 内閣府「国民経済計算」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

●名目家計消費増加額は約2,253億円

マクロ的に見て、有職者の余暇時間が名目家計消費に対して及ぼす影響を検証した。ここで用いる有職者の余暇時間は（365日×16時間（1日の活動時間）－総労働時間）とした。資料3は各年の有職者の余暇時間が名目家計消費に及ぼす影響を試算した結果である。これによれば、余暇時間の増加が名目家計消費にプラスに影響することがわかる。今年の夏休みの影響を見た場合、前年比で0.00891×16時間×0.7日＝＋0.1%今年度の名目家計消費が増加することになる。尚、昨年度の名目家計消費は226兆円程度であることからすれば、約0.1%の増加は約2,253億円に相当し、足元の有職者を約6332万人（2004年度平均就業者数）とすれば、有職者一人当たり約＋3,558円の名目家計消費の増加となる。

(資料3) 名目家計消費（除く帰属家賃）の推計結果

$$\text{Log(名目家計消費)} = C + \alpha * \text{Log(可処分所得)} + \beta * \text{Log(家計純資産)} + \gamma * (\text{余暇時間})$$

尚、家計純資産＝家計在庫＋家計固定資産＋家計土地＋家計金融資産－家計負債

推計期間 1980年度－2003年度。OLSにより推計。

	C	α	β	γ	決定係数
係数	－0.303	0.87708	0.08308	0.00891	0.998
t 値	－1.4004	12.4639	2.5859	2.5742	

(出所) 内閣府「国民経済計算」、厚生労働省「労働力調査」「毎月勤労統計」より試算

●名目サービス輸入増加額は約60億円

夏休みが長くなることで海外旅行が増加すれば、海外での旅客輸送や旅行支払い額が増加し、GDPの控除項目である財・サービスの輸入額増を通じてGDPを押し下げる。そこで、マクロ的に見た有職者の余暇時間が名目サービス輸入に対して及ぼす影響を検証した。資料4は、各年の有職者の余暇時間が名目サービス輸入に及ぼす影響を試算した結果である。これによれば、余暇時間の増加が名目サービス輸入にプラスに影響することがわかる。今年の夏休みの影響を見た場合、前年比で0.00363×16時間×0.7日＝0.04%、今年度の名目サービス輸入が増加することになる。尚、昨年度の名目サービス輸入は14.8兆円程度であるから、約0.04%の増加は約60億円に相当する。昨年7－9月期の

名目サービス輸入が約 3.7 兆円であったことからすれば、今年 7－9 月期の名目サービス輸入を＋0.1%ポイント押し上げる要因となる。

(資料 4) 名目サービス輸入の推計結果

$\text{Log(名目サービス輸入)} =$

$C + \alpha * \text{Log(名目 GDP)} + \beta * \text{Log(輸入デフレーター/GDP デフレーター)} + \gamma * (\text{余暇時間})$

推計期間 1991 年度－2004 年度。OLS により推計。

	C	α	β	γ	決定係数
係数	−26.8079	2.94855	−1.0011	0.003628	0.894
t 値	−4.4226	5.7419	−5.2504	2.1249	

(出所) 内閣府「国民経済計算」、財務省「国際収支統計」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

●名目 GDP 増加額は約 2,193 億円

以上算出された結果から、名目家計消費増と名目サービス収支支払い増を含めて名目 GDP への経済効果を試算すると、その額は $2,253 - 60 = 2,193$ 億円程度となる。これは 2004 年 7－9 月期の名目 GDP の約 0.2% に相当することとなる。また、足元の有職者を約 6332 万人（2004 年度平均就業者数）とすれば、有職者一人当たり約 +3,463 円の名目 GDP の増加となる。

●品目別の名目家計消費では、娯楽・レジャー・文化への影響大

以下では、マクロ的に見た有職者の余暇時間が品目別の名目家計消費に対して及ぼす影響を検証した。試算方法は資料 5 の通りである。

(資料 5) 品目別名目家計消費の推計結果（推計期間 1980 年度－2003 年度）

$\text{Log(品目別名目家計消費)} = C + \alpha * \text{Log(可処分所得)} + \beta * \text{Log(家計純資産)} + \gamma * (\text{余暇時間})$

尚、家計純資産＝家計在庫＋家計固定資産＋家計土地＋家計金融資産－家計負債

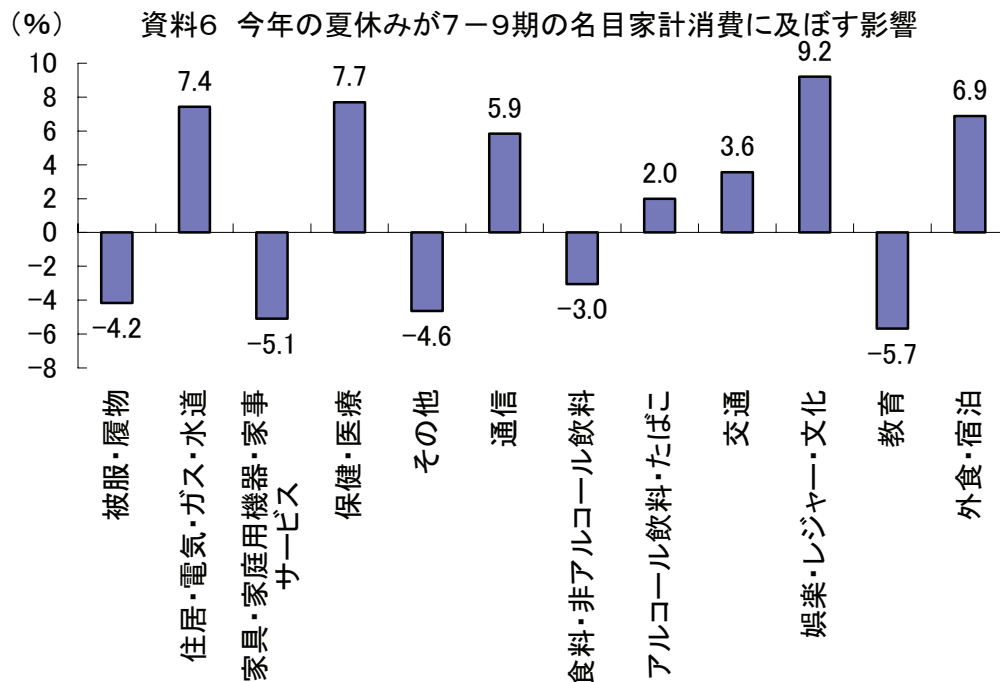
品目間の相関を考慮して各品目の連立方程式を SUR により推計し、誤差項の系列相関が検出される品目については AR(1) モデルに修正した（結果は省略）。

(出所) 内閣府「国民経済計算」、厚生労働省「労働力調査」「毎月勤労統計」より試算

資料 6 で 7－9 月期の品目別における名目家計消費に及ぼす影響を示すと、余暇時間の増加が名目家計消費に及ぼす影響は品目によってマチマチであることがわかる。

プラスの影響として目立ったのは、やはり外出を伴う娯楽・レジャー・文化、外食・宿泊、交通といった品目だった。また、外出に伴うケガ等や海外旅行者の増加による保険加入費が増加することが影響しているのか保健・医療にもプラスの影響が目立った。更に、休日が増えることで有職者が自宅に在る頻度が高まることを受けて、住居・電気・ガス・水道や通信といった品目、余暇の増加で嗜好品の摂取が増加するのかアルコール飲料・たばこといった品目にもプラスの影響が検出された。

一方、娯楽・レジャー・文化等の非日常的な支出と代替的な関係にあるのか、被服・履物、家具・家庭用器具・家事サービス、食料・非アルコール飲料等の日常的な支出においてマイナスの影響が検出された。また、休日の増加等により学校や塾が休講になること等が影響しているのか、教育関連にもマイナスの影響が検出された。



(出所)内閣府「国民経済計算」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

●産業別ではサービス業への影響大

続いて、マクロ的に見て有職者の余暇時間が産業別の名目GDPに対して及ぼす影響を検証した。試算方法は資料7の通りである。

(資料7) 産業別名目GDPの推計結果 (推計期間 1980年度-2003年度)

$$\text{Log(産業別名目GDP)} = C + \alpha * \text{Log(名目GDP)} + \beta * (\text{余暇時間})$$

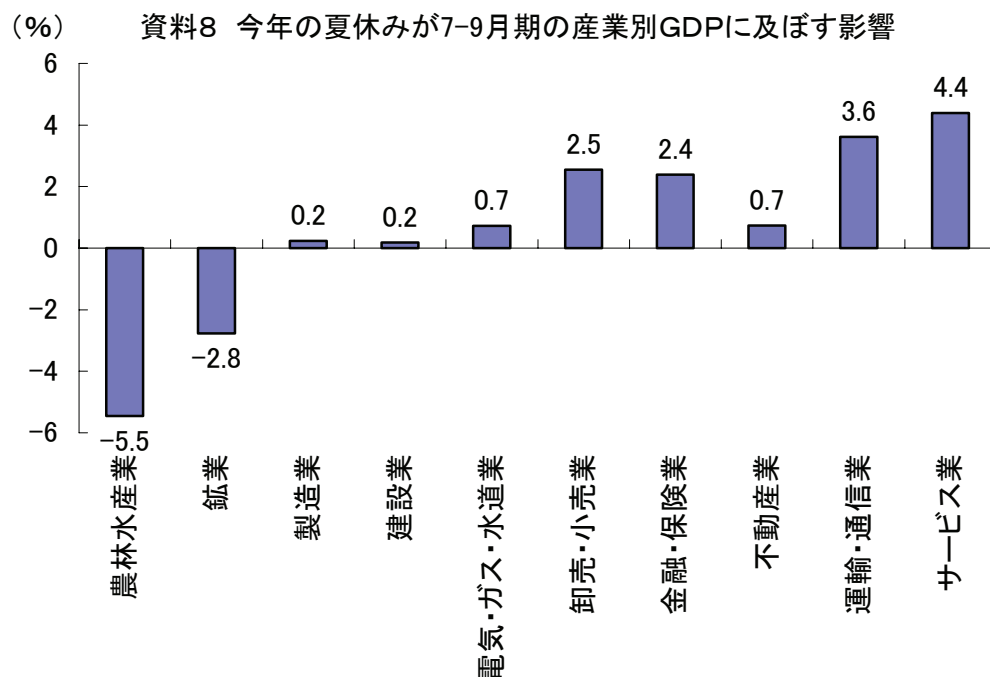
尚、名目GDPと不動産業GDPからは帰属家賃分を除いた。

品目間の相関を考慮して各品目の連立方程式をSURにより推計し、誤差項の系列相関が検出される品目についてはAR(1)モデルに修正した(結果は省略)。

(出所) 内閣府「国民経済計算」、財務省「国際収支統計」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

資料8で、7-9月期の産業別名目GDP前年比に及ぼす影響を示すと、余暇時間の増加が名目GDPに及ぼす影響も産業によってマチマチであることがわかる。

プラスの影響として目立ったのは、やはり娯楽・レジャー・文化関連支出の関係の深いサービス業であった。また、買い物に出かける頻度も増えるのか卸売・小売業、更には海外旅行増加に伴う保険や両替手数料の増加もしくはトータルのGDP増加が影響しているのか金融・保険業にもプラスの影響が検出された。一方、労働投入の減少や設備の作業時間縮減の影響を受けるものと思われる農林水産業や鉱業等ではマイナスの影響が目立った。



(出所)内閣府「国民経済計算」、厚生労働省「毎月勤労統計」より試算

●足元の状況を勘案すれば、夏休み特需上ブレの可能性も

本稿では、SNAで定量化が可能な需要項目や品目、産業を中心とする今年の夏休みの増加が日本経済に及ぼす影響を算出した。しかしこの他にも、例えば昨年と比べて夏のボーナスなど雇用・所得環境が改善していることや、愛知万博等によるイベント効果が期待できること等から家計消費に押し上げ効果が期待できること、テロにより一部海外旅行が抑制される可能性があること等によりサービス輸入が押し下げられる可能性もあり、当社が想定する以上の特需が発生する可能性も否定できない。逆に、夏休みの期間が天候不順等に見舞われれば、想定ほど特需が発生しない可能性もあるだろう。

尚、今回の試算に当たり種々の仮定を置いていることから、特需の額に関しては十分な幅を持って判断する必要がある点についてはご留意いただきたい。